



そもそも漢方って何ですか？

そうですね。漠然としかわかりませんよね。

でも漢方薬は皆さんご存じですよ。古くからある伝統的な薬で、何やら植物を干したものを土瓶などで煎じて飲む、あれです。時代劇などでよく見かけるシーンに、

「おとつあんが病で、貧しくて医者にかかれず薬も手に入れられない…」と嘆く娘がいる、というのがあります。そのときに、ヒーローの男が訪れて、「ほれ、おとつあんに飲ませてやりな」

と、紙に包んである薬草をポンと娘に渡し、それを開けた娘が眼を見開き、

「まあ…こんなに！ なんとお礼を申したらよいか…！」

などというシーンが続くのですが、あの紙に包まれたものは、だいたい高麗人参です。滋養強壮によく、これで病を治せる最良の薬、というくらいの知識は当時の一般庶民にもあったのでしょ。価格は、「薬代の代わりに娘が身売りされそうになる…」などというくらいですから、相当高価なものだったのではしょ。

話は変わり、徳川家康は、天下を取るまで各地を転戦していましたが、いつも漢方薬を携行して飲んでいたそうです。これも時代劇のシーンですが、家康が何やら薬草のようなものを、細長い舟のような形をしたものに入れ、ゴリゴリと磨り潰すというのがあります。これは漢方薬を作っていたのであって、できあがりは粉薬だったようです。

だいぶ話は脱線しましたが、このように古くからある薬で、薬草を煎じたり、粉に挽いて飲んでいたりしていたのが漢方薬です。もちろん、おとつあんの病気の治療に用いられると同時に、家康のように健康維持にも用いられていたものです。

さて、上で出てくる薬草を干したものは、正式には「生薬」といい、これをそのまま、あるいは決まったレシピに従って調合し、服用したものが漢方薬です。レシピとはどんなものか、どうやってできたのか、どこに書いてあるのか、

などについては追々お話ししていきます。

漢方薬は、もともと中国で発見、開発、発展したもので、それが遣隋使・遣唐使らによって日本にもたらされたものです。正倉院のお宝からも数十種類の生薬が出てきて、ちょっと前に話題になったこともありました。

中国から仕入れた医学は、やがて平安時代に入って遣唐使の廃止とともに、わが国独自の発展の道をたどることになります。その後も、大陸と多少の情報交換はあったようですが、江戸時代の鎖国期間に、わが国独自の発展にさらに磨きがかかり、多くの名漢方医が輩出されています。

さて、時代は下って江戸末期になると、鎖国がお終いになり、海外との貿易が再開されます。これに伴って医学も海外から流入してきます。特に西洋医学が圧倒的な勢いで入ってきました。オランダ医学がメインでしたので、その医学は“蘭方”とよばれました。では既存のわが国特有の伝統医学は何とよぶかという話しになり、ここで初めて“漢方”という名称が誕生しました。

「オランダ医学＝蘭方」にならって「日本特有の医学＝漢方」とした

漢方はいまでは“漢方医学”ともよべれます。これでは“日本伝統医学医学”みたいで、本当はおかしなよび方ですが、いまでは普通に用いられていますね。“東洋医学”といういい方もします。

さて、明治・大正・昭和時代には西洋医学が主流となり、漢方はごく少数の医師によって細々と用いられるほか、漢方薬が漢方薬局で販売されることで命脈を保ってきたのですが、昭和末期になり、わが国の健康保険制度でも漢方薬が使えるようになってから、漢方治療が一般の病院や診療所でも行われるようになりました。平成に入ってから、医学部の正規教育プログラムにも漢方医学が取り入れられるようになり、現在のようにどこでも漢方薬が処方される時代になったわけです。

大事なことですが、漢方薬を処方することと、漢方医学を実践することは違います。例えば、感冒に葛根湯、月経痛に桂枝茯苓丸、というのは、これは漢方薬を現代医学の薬のひとつとして使っているに過ぎません。漢方医学では、患者の脈を診たり、舌や腹を診たりして、独自の理論に則って診断し、薬を処方します。これについては後で詳しく述べていくことにします。



東洋医学を学ぶ意味は何ですか？

現代医学の発展のなか、どうしていまさら“古くさい?!” 東洋医学なのでしょうか？

私にとっては、一言でいうと面白いからなのです。しかし、こういってしまうと、元も子もないですね。

読者の多くは医療関係者でしょうから、話を具体的にしてみましょう。

日々、いろいろな症状の方が外来に来られます。なかには、現代医学の検査を突き詰めてやっても、はっきりとした異常が認められない場合があります。そして、人はそもそもなぜ病になるのか？ という根本のところはほとんどわかっていません。感染症など明らかな病原体がある場合はよいにしても、例えば、膠原病の炎症の火種になっているものは一体何なのでしょう？ 臨床をしているといろいろな疑問が次から次へと湧いてきます。

このような疑問を考えていくうえで、異なる医学体系は非常に示唆を与えてくれます。そして、完璧でないにせよ、患者さんの病態把握と治療につながるのです。

せっかく相談に来ていただいた方に、

「今の医学ではわかりません」

「今の医学では治療法がありません」

といって帰ってしまうことがあると思いますが、「今の医学」だけで判断するのは、医療の専門家としてはもったいないような気がします。患者さんの健康を守るのが医療の役割だからです。

東洋医学は、脳内をハイブリッド化するためにインストールする 必須アイテムです

多くの勉強をして現代医学を身に着けた皆さんであれば、一定の時間をかければ東洋医学は十分に理解可能なものです。

東洋医学の臨床は、毎日が発見です。患者さんの症状を聞き、考え、処方す

るなかで、自分の患者さんを診る精度も上がってきます。よくなった症例に関しては、他の医師と討議して、東洋医学的にはどういう病態か、また西洋医学の見解ではどのような病態、または仮説であってもどのような機序と関与する可能性があるのか？ こういった切磋琢磨が臨床の力量を上げていきます。

患者さんは実に、いろいろな質問をします。それは時に非常に深く、哲学的で、どきっとするものもあります。

「わたしは何故このような病気になったのでしょうか？」

「体質を変えて健康になるためにどうしたらよいですか？」

「食事で気をつけることはありますか？」

東洋医学では薬による治療にとどまらず、食事、精神生活に関する知恵、それをサポートする東洋思想、哲学を幅広く有しています。こういう質問は患者本人が健康になりたいという意志表示なので、十分にサポートしてあげるとは、非常に意味のあることなのです。

ですから、「今の医学」だけに留まらず、もう一歩進んで、違った方面から人体の病理を眺めてみるのはどうでしょうか？

東洋医学はさらに、皆さんの健康を守るのに非常に役に立ちます。多忙な毎日のなか、皆さんもより健康な状態を目指すことは、仕事以外にも充実した時間を与えてくれる、と私は考えています。

今後の医療の在り方を考えるのに、一見両極にみえる医療体系を融和的に取り入れる。ひょっとしたら日常臨床においては、最先端？ になるかもしれません！？ 西洋医学を学んだ先生方であれば一定の修練によって、東洋医学の診断技術は十分高められるものです。その過程では、“アバウト”な主観が入りがちなので、厳密な西洋医学的病態も深く学び、絶えずフィードバックしながら、東西医学双方の臨床の眼を深めていく必要があるのです。



東洋医学の理論は面倒くさそうですが、
必要ですか？

語学を例にして考えてみましょう。

外国語を学ばれたことのある方なら、おそらく実感されていることでしょうが、各言語のそれぞれがもつ語感、ニュアンス、またそれに伴って言語体系に含まれている思考パターンが違います。違う言語を話しているときは、不思議と本人の性格も違ったものが表現されるものです。英語を例にとりますと、英語を話す自分は、他人からみれば、いつもよりもずっと積極的に自信に溢れているように見えるかもしれません。日本語のときは、より謙虚な振る舞いが強調されているかもしれません。それぞれの言語を話すときの人格が違い、別人が話しているようにもみえ、なんだか二重人格っぽいのですが、これは言語体系が、それぞれその背景にある文化とも結びついているため、とても自然なことなのです。

中国語、英語を例にとりましても、確かに相互に意味を翻訳可能です。しかし、それぞれの言語が独自に有している広大な領域は、それぞれの言語を学ばないと咀嚼できないものなのです。

この違いは、文字にも表れます。アルファベットは単なる符号で、組み合わせられて初めて意味をなすものですが、漢字は各文字が表音文字にない多彩なイメージを含んでいます。1字だけでも意味をなすのです。そのニュアンスは翻訳しきれないものです。

➡ 医学の思考を、医学的バイリンガル、dual mode へとバージョンアップしましょう

東洋医学と西洋医学にも同じようなことがいえます。双方を深く学ぶことで、両医学の最も優れた部分を会得し、診断の深みを増すのはもちろん、科学的検証のアイディアも深めていくことができます。

東洋医学と西洋医学、双方の医学体系は異なっています。しかし、その翻訳の段階で非常に大事になってくるもの、それは、両者をつなぐ根幹である“理